

てゐる。

だが諸君、辭書を索き、で、面白いですか。困りましたね。

『タキシで行きませう』
と更に薦める。

『ちあ、この次にしてくれ。今日は見物だから……きつとこんど逢つた時には一緒に行くことにするから。』

『さう！ では貴郎を信じて今日は別れますが、きつとこんどの日にはね。』
と女は握手をしてさつさと行つて了つた。

で、又私は一人でぶら／＼と歩いてゐると直ぐ別の女が、また道伴れになつた。

『紳士、私と面白い處へ行きませう』

とこれは流暢な英語だ。

『何處へ行くんだ』

『私の家でも、ホテルでも』

『幾何だね』

『七十リラです』

『處が相憎私は今日着いた計りで、リラは一つもないのだ』

『それでは磅でもよろしい。磅なら持つてゐるでせう』

『いゝや、それも此處には持合してゐないよ。信用状になつてゐるから、明日でなくちや手に入らないから駄目だ』

といふと半信半疑のやうな表情をしてゐたが、それも諦めたらしい。

『では明日また逢ひませうよ、この附近でね、忘れないで下さい。』

と、私から離れて行つた。

すると後方から私に呼びかけた女がある。見ると前の言葉の判らぬ女だ。

『まだ見物してゐるんなら私と行きませんか。』

『今日は駄目だよ。誰から何といはれても今日は本當に駄目だから……』

『さう、ちやゆつくり見物をなさい、さよなら』

と、素直に行過ぎる女の後姿を眺めて、ふと私はこの女に興味を感じて来た。

『ちよいとく』

呼び止められた彼女は驚いて振り返つたが、私の笑顔を見るとさも嬉しさうにして子娘の如くに跳んで来た。年は廿二三だらうか、一寸美しい顔や軀だ。

『それぢや、お茶を飲まうか』

『あら嬉しい、え、行きませう。』

と、女は直ぐ腕を組んで元氣に私と並んで歩き出した。

一體、言葉の解らぬ場合にはどうなるのだらうかといふ興味が起らぬではないだらう諸君も！

で、私は更に一步を進める氣になつた。

『寧ろ、君の知つてゐるホテルへ行つて、お茶でも飲まうか。』

『え、それが一番よろしい。私が案内します。』

で、とう／＼ホテルへ行くことになつて了つた。

ピヤ・サン・ピエトロの響き、銀線を振り揺る如うな美しい響と私は云つたが、言葉の解らぬ響、意味の取れぬ響をこれから聞かうとする譯だが、それは本章の題目を欺くこととなるから省く。それに、意味の取れぬ響の記しようもないではないか！

世界の巴里に公娼訪へば

世界の巴里も今は、世界のニコヨークにお株を奪はれ氣味であるが、でも追に歴史的遊樂の土地ではある。

何から見て歩かうかに一寸思ひ迷うたが、先づ公娼から見ることには決定して出かけた。

それは記念すべき一九三〇年の月日であつた。我が使命に榮光あれ！

先づ足を向けたは堂々たる四間間口のハウス、オブ、オールネーションといふ家である。

それはバリー株式取引所に近いシヤパネ通りにある十二番館といふ名物である。氣を大きくして諸君は私について來ればよろしい。決して諸君の懐を痛める如うなことはせぬから。

おつと、この扉を開けた内のこの洞窟、これは模造ですよ。紅蓮の焰が燃え上つてゐるやうに見えるでせう、詰り血を湧かす世界へのこれが入口ですよ。

で、此處で注意して見てをく物はあの正面の大理石の女の裸像なんかではないの

で、その側に鎖の巻きつけた鐵の柱のあるのこそ見てをくものですよ。

これが變態性慾者の爲の設備を示したもので、サディストも、マゾヒストもこんな設備を要することを知ればいゝです。

こゝから奥へ這入るのです。

そこの室が主婦の家です。

さてこれから二階三階四階と順々に見るのですよ。そこは英國、佛蘭西、白耳義印度、埃及、露西亞、西班牙とあるが、先づ日本を見よう。

藤色の絹に花鳥を刺繍した美しいカーテンがかけてあるこれが日本の室だ。人力車の繪も壁に下つてゐるでせう。此方にはダブルベット、それから此方がタイルのモザイク張りの浴室と便所です。

尤もこのベットや浴室、便所等は各國風の室にも必ず設けられてゐるので、日本だけと思つちや不可い。

英國の高い身分の人の爲に作つたといふこの寢臺は佛國のベルサイユ宮殿の寢臺

を模造したものです。こつちがその英國の身分高い人の爲に沸したキスキー風呂だといふことです。浴びたり飲んだりしたいなどと卑しいことは云はぬものだ。で、今迄の見物料は私が支拂つてをいたがこれを見るだけで一人四十法です。で、どうしますか、歸る人は歸りなさい。これからこの先は品行方正の人は見る處でないですよ。さあ次の室ですが……

眞ッ赤な部家だと思へたのは、敷いた緋のカアベツトが周圍に張りつめた鏡に映つたのですよ、何とこの部屋には驚くでせう。

處で、この室が鏡の間といふ奴ですよ。鏡の間が、これだけでお了ひなら、全く人をお上りさん並に見るものです……だが、一寸、待つて下さい。

さや、さやと絹摺れの音が……しませんか？　しない？　は、は、は、貴君は自分の脈搏の高くなつた爲に耳が鳴つてゐるんですよ……いや大丈夫、こゝは巴里公娼の家です。なんのく日本から眼が届く理窟がないぢやありませんか。

まあ氣を落ち着けて下さい臍下、うふ……丹田にね。

そら、いよく聞こえるでせう。いよく来ましたよ。

一人二人……六人七人……九人八人……何でも十人程来ましたね。ラ　ラ　ラ　裸　裸體ですよ……シツ靜かに。あの連中を歸して好かつたですね。

藝術ですね、藝術は裸體ですね、裸體は女ですね……女は……ハシツシユー　せうら、とても素晴らしい身の動かせ方ぢやありませんか。

何ですあの音は、あゝ、あの音はシヤンパンを抜いた音ですね。詰り町の三十法のシヤンパンを、此處で六十法から百法も出して買った方がうまいといふのですね。何です？　どうしたのです？……さう裸體の女の方へ走つて行つちや困るぢやありませんか。

何？　各國お好みの室へ行つて室料共に一切で二百五十法？

そりや何の意味です……そりや。

何人居ますか、こゝに……半分ですね。

さうすると半分は今の二百五十法に残つたのですか……ちや、まあ、いゝとして行くんだ。

さあ、この紫の旗を目印に眞ッ直ぐについて来て下さい。——うっかりしてゐると、今日のボン引代がフイになるんだから、これで大切なお客様だ——そんな事あ日本でなきや云はない事ですよ。恥かしいからそれは秘密にしてをきませうよ。

さあ、此處から左へ曲りますよ。皆さん左の手を横へ差し出して下さい！

さて、この通りがコルベ―通りです。目的の家はもう直ぐですよ……。

このたつた一軒の感じの違つた家が、クリスタルパ―レスと云ふのです。

いや、挨拶は私が代表します。

『今晚は』

『いらつは——い』

あれがお女將ですよ。さうですとも、定り切つたやうに女將を出すと云ひなさるが、でも、お女將の居ない商賣屋などがあると思つてゐるのですか。

海考茶のカーベツトが敷いてありますが？ いゝですよ、遠慮なくおはいりなさい！ 氣を付け！ 何人です……あゝ先刻の儘ですね、では、そのソファ―へ腰をお掛けエーツ……。

自動ピアノが鳴つてゐますね。

そこで、また此處へ裸體の女が来てダンスをはじめののだが、それがすめばシャパンを抜けとすゝめられたりすることは前段の通りです。

さあ、美しい肉塊を持つた女が來ましたよ。

いよくダンスが始りました。やれよく惱ましさを限りですね。

別室では性に關する映畫を見せると云ひますよ。

宿泊料は百五十法となつてゐます。それにこの家は例の木製のダンコンを持つて二人の女性が、二千年前のボンベいの處で云つた如うなことをしてみせるのです。だが、それも鼻につきましたね。それよりはグラン・ブルヴァール附近の三十二番館のオーベルブルへ行くと、裸體で藝當する女給等がゐます。テーブルの上の二

法を上手にはさみ取るなどは全く見物ですよ。

で、此處で解散することゝします。それについて、一二の變つた點を説明してをきますが、大體、今迄に見た處によつてパリ公娼の家はその要を盡してますよ。後は何處も大同小異です。表に番號入りの軒燈が下つてゐて、家内に娼がゐて、ね。だが、變態性慾者の爲の設備のあの家には一寸變つたのがあります。

先刻のオールネーション以外にも大きな公娼の家には、變態性慾の爲の設備を持つてゐますよ。オールネーション等は、鐵格子に圍まれた牢屋の中に等身の臘人形がいられてあつて、その實況を見せてゐます。女の尻にナイフを刺したのや、血の流れ出てゐる光景等は眞に迫つてゐますよ。

天井から綱が下つてその綱に一枚の板が吊したのがあります。これはその上に男なり、女なりが乗つて、具えつけの鞭によつて、ぶつか、ぶたれるして快感を覺えるといふのですが、その料金は四五圓取られるのです。

公娼は語學が大抵英一國位は使えますが、娼次第では三四ヶ國の外國語を自由に

用ひられるのがゐますから、諸君はその内の自分の得意なものを用ひて交渉され、ばよろしい。

公娼の家は右の様なものです。家の前には眞鍮の看板が出てゐるから直ぐ判ります。それから世話を焼く女、日本の遣手婆に當るのがマダムと呼ばれてゐる婦人です。

では諸君、パリの公娼訪問は、これでは諸君の自由行動に任せます。

モンマルトル情痴の饗宴

さても惱ましき巴里ですな。

私は名にしをふ夜のモンマルトルをそぞろ歩くのです。そして思ふのです。何といふ惱ましきであらう。

夜はもう十二時に近い。

グラン・ブルバールのマドリン・チャーチ傍の地下鐵で約三十分でせう。此處モンマルトルへ放り出されて、さて私は溜息ばかりが出るのです。

淺草と新世界と千日前の寄合つた如うな此處で、私は自分をどう處分すればよいか迷つて了つたのです。

先づ私は一軒の料理屋へはいつて落着くなり、享樂するなりいづれともすることに決めませう。

私のはいつたのは大きな此家です。何といふさわめきと艶かさと酒のいきれだ。入ると右手が管絃樂隊がジャズとタンゴ曲を奏でてゐる。左手には長い大きなバーがあつて、高い腰掛の上には男も、殆んど裸體の女も、腰を掛けて酒を飲んでゐる。

その女の怪しく組んだ脚は場内中へ催情的な刺戟を散らしてゐます。

中央はダンスホールだ、私はその周圍に作られた觀覽席の卓子につきました。傍には有名なボックス席があります。

何といふ澤山な商賣女の數だらう。そうら近寄つて來た。私の方へ笑ひかけて來る。

『お一人では詰らないでせう』

『うゝ、まあ掛け給へ。仲好くしよう』

で、私はこの女にも酒を取つてやりますよ。でもさうすることが一種の規定なのですからね。

『時にどうだね、面白いことを見せないかい。』

『えゝ見せてあげませうか。もつと酒を、シャンパンを抜いて下さいよ。』

『よろしい』

これもしかたがないでせう。

丁度直ぐ前方のテーブルでは、メリケンらしいのが、豪奢に振舞つてゐる。もう既に大分酔つてゐる。

『おい、あのメリケンは大分盛んだね』

『え、あれは今に小部家へ納まります、よ、そしたら、そつと貴郎に見せて上げるから、どつさり私に飲まして頂戴よ』

『それは面白い。』

『そうら、ちよつと、御覧なさい。今はいつて来た小娘を連れ込んだのね、そうれ小部家へはいつちやつたでせう。あれがどうなると思つて？』

『うゝ………』

『ね、私が説明してあげるわ………この間もね、私そつと覗いてやつたの、その時は本當に子供からちよつた青年の方へはいつたばかりの娘なのよ。それが、迎も来た時は恥しさうだつたのに、小部家へ這入つて男に飲まされて、すつかり酔つて了つてね、とても大變。まるでお人形さんよ。どうされても、接吻されよ何があら

うがまるで、天國の啓示を読むやうな眼つきでほうつとなつて了つてゐるのよ………ね、貞操つていふのは何のことを云ふものなのさ………便利に出來てるわね、モンマルトルは。本當に戀する人の天國よ此處は………』

『おい、メリケンが部家の方へ納まつたよ。まだかい？』

『もうすこし御馳走して頂戴よ、それからでなくつちや』

『おいもうそろ／＼いゝだらう』

『ちやね、ほんの一目よ。ようく見ときなさい。貴郎も千法も使ふ氣なら直ぐお相手をして上げるから、参考によく見ておきなさい』

『いゝとも………』

場内は踊りと奏樂と酒と食とが水蒸汽の如うにいきれ立つて、人の觀念を酔ひ痺れさせて了つてゐる。人の酔つた頭の中を形にすれば、かうも濁りかうも陽氣でかうも華美なものだらう。

私も飲んだ量以上にこの氣分の酔が強烈に動いてゐる。

ふら／＼と立上つた女に曳かれて、一寸鍵穴から、先刻のメリケンの情痴の饗宴振を拜見することにした。

ほう！メリケン君、今は既に正體なき迄に陶醉して居る。膝に抱いた女のあるのも恐らく氣ついては居まい。而もその女は手に黒の長手袋、足に黒の短靴下とだけで、その外には全身に一糸も纏つてゐずその全身が潤み光つてゐる。テーブル上には轉がつたシャンパンの空壇の間で一人の同じ姿の女が踊つてゐる、いや、跳ねてゐるのだ。脚を鼻の先までも跳ね上げ跳ね上げ、くるりくるりと舞ひつ踊つてゐるのだ。

私の相手の女は私の腕をぐいと曳いた。

『さあ、もう澤山！ テーブルへ行きませうよ……』

『あゝ』

私は、腦の蕊の痛むやうな感じを覚えてゐた。ふら／＼とテーブルに戻つて私は盛んに飲んだ。煽つた。

『ね、二百法！そして私と遊びせうよ……ね。そんなに酔つちや、もう歸ることも出来ないでせう！ だから私が介抱してあげるから……』

『二百法？』

それから何がどうなつたか。私は前後不覺に酔ひ潰れたのだ。

諸君は酔はないのだから、どうか、この先は諸君が私に代つて説明をしてくれ給へ！

私はもう魂が痺れたやうだ！

諸君ぜひこの先の説明を頼む

見^みる物^{もの}と視^みく物^{もの}

私は誠に船都合悪く、このマルセイユへ來合せて了つたことを、使命の前に、諸君の爲に歎くのである。

船は今夜出帆するといふのだから。

さて大急ぎだ。何は兎もあれ私は見るだけのもの、味だけのものを味はねばならぬ。トランクも何もかも、荷物はホテルへ放り込んだまゝで、さて大急ぎだ。

此の港から真直に行つて一番賑かな通りへでよう。で、これを上つてクツク旅行社と當港第一のホテル・ルーブルが……おう、あつたあつた。そのカフェーについて左折して、又左へ曲ると。やゝこしいぞ、間違へぬ様にしなければならぬ。

この邊は労働者街だが、もう少し行つてみようこれだ表札にミス・マルセイユとあるぞ。公娼の家だ。小さな汚ない三階建の家だな。寧ろ、も一軒の大きい方の家を見ればよかつたらうか。

まあいゝ案内を乞ふてみよう。

何だ婆さんが出て來たな。

『活動寫眞を見に來たよ』

『どうぞ御這入りなさい。』

ふう、二階へ上げるのか。この二階廊下のカウンターみたいな臺は何だらう。さう、大變綺麗な若い女がゐるぞ。

『今晚は』

『今晚は……此方へ來て下さい』

何だこの若い女が案内するのか、何だらうこの女は？ 問ふてみよう。

『貴女は相手をするのかね』

『いゝえ私はこの家の主人です』

『あ、ミス・マルセイユといふ』

『さうです。……どうぞ此室へおはいり下さい。』

『活動寫眞は此處で見せるのかね』

『さうです。何種類見ますか』

『そんなに何種類もあるのか』

『澤山ありますよ。二種類一組で幾組でもあるのですから……何種類見ます？』

『何種類でもいいが、料金は幾何するのかね？』

『一組だけで百法(約八圓)です』

『恐ろしく高いね』

この女は掛値をしてゐるのだ。實際は三十から五十法で見せるものだといふことを私は知つてゐるのだから。

『高くはありませんよ』

『駄目々々、高いよ。三十法でいゝだらう』

『いゝえ、そんなに安くなど出来るものですか』

『駄目だよ、ちゃんと相場を知つてゐるのだから。では四十法よりは一法も多くは出さんぜ』

『仕様のない方だ……ちや、すこし待つて下さい。仕度をしますから』

とうとう負けて出て行つた。

手つ取り早く話をしてはう。それからね、どの位を待たす積りでゐるのだらうかと思つてゐると、十人計りの女が薄い肌着を着て、どかどかといつて來た。

素晴らしい肉體がその薄い肌着を通して見えてゐる。またダンスでもしようといふのだらう。

『此の中で誰か御氣に入つたのが一人か二人あるでせう。それを選んで下さいと意外な申出だ。』

『おい君方、私は女を買ひに來たのではないよ。』

『えゝさう、映畫を見にいらつしたのでせう。だからこの内の一人でも二人でもを選んで下さらなきや困りますよ。』

『それでどうするんだね』

『その氣に入つた女と一緒に映畫を見て貰ふのですよ。』

『成程、考たものだね』

で私はその内の好ささうな女を一人選び出して見た。
すると、女は忽ち私の傍へ跳びついて来た。

『ね、シャンパンを抜いて頂戴』

果せる哉である。だが私もシャンパンは誠に結構の方である。そこで一本を注文して二人で差しつ押さへつで乾して了つた。

その間にも女は私に媚を送ること盛である。だが私はそれ位いで参るやうなのではないこと既に諸君が知つてゐる筈だ。

すると映畫の仕度はできたといふ通知だ。

『さあ行きませう。』

『何處で映寫するんだね』

『階下ですよ』

來てみると、それは地下室のやうな處である。而も他に人氣は誰もゐない。私と女の二人丈である。

こゝで見る映畫がどれ程馬鹿々々しいものかは、説明を差控えよう。餘りな、どぎつさによつて挑發されるよりも撃感させられて委縮して了ふ。

たゞ、その間に女がどれ程手を握り、舐を摺りつけて挑發的なことをすることか、寧ろその熱心の方が數段可とすべき所があるだらう。

で、大變鼻息の荒い私の云ひ表はし方に諸君は驚いては不可ない。實は底を割つて申せば、これも一番最初に此處を見たのであれば、或はもつとこの映畫に感激（？）したのかも知れなかつた。處が我使命は既に々々、多くの經驗を私に積ませた故に、今更これにはさほどに動かされなかつたといふまでである。

處で諸君の内にこれを見たいと云ふ人があるなら、どうぞ御隨意に御參觀なさるがよろしい。

で、私は映寫技手にチップを與へてをいて無事に、おう如何に見上げた無事振であることだ、無事にこの家を出たのである。

諸君よ、こゝの家でこの映畫を見てこの女を買つて、數百フランを取られる日本

人の頗る多いとふことは、まあ極く秘密にしてをいて下さい。餘り感心出来た話でないから。

さて、まだ出帆には大分時間がある。

私はこの間に更にもう一ヶ所の、マルセイユ名物を參觀して来ねばならない。

諸君はこんども待つて居つて呉れねば困る。何あに私は直ぐ歸るから。

處で私の行く先であるが、これはステーションへ行く道から右に入つた所だと聞いてゐる。なる程来て見ると労働者相手の私娼が盛んに活躍して居る附近に、三階建のルーエ・メートルといふ名の家が直ぐ見つかった。出て来た五十女に私は

『覗きを見に来たのだが』

と嚴な來意を通じると、

『暫くお待ち下さい。今に他の客も来るでせうから』

と、戸の内の右手の室へ通された。がそこには誰も居ない。一人ぼつちで私は約三十分も待たされたらう。先刻の老婆があたふたと遣入つて来て、

『さあ急いで階上へ上つて下さい。』

と急ぎ立てる。

階上の室といふのは細長い室で、別にベットも何も無い暗い室なのだ。室の壁には丁度目の高さ位いの處に窓が切つてある。そこに高さが一尺二三寸横一尺位の壁が切抜いてある。見ると壁には鏡があり金網が張つてあるではないか。

私は四邊を見廻してぼんやり突立つてゐると、その老婆に

『お静かになすつて此處から見てゐて下さいまし』

と云はれたので、そこから覗いて見ると隣りの室が是々と明るく眺められる。

さて困つたことだな。これをどう諸君に話せばよいかだ。これは失敗した諸君を連れて来ればよかつた。それが一番よかつたのであるのを、私は一人で来て了つたのだ。

さうするがよい！これから諸君を迎えに行つて、連れて来よう。さうすれば百聞に優ることだ。まだ、その邊に諸君の後ろ姿があるだらう。

大急ぎで迎えに行つて來よう。

おうい！諸君、こつちへ來給へ！覗きを見せるから。どんなだつて？そんなことは御自分で見てから知るが一番早い！さあ大急ぎだ、一緒に來給へ！

東洋の樂園

國を出で、半歳、異國を闊すること數ヶ國に及びし我が壯學も、今や將に終らんとしてゐるのであります。既に私の香港に於て乗換し乗船は、早くもその船脚に黄海の波濤を切りつゝ、東洋の樂園上海に接近しつゝあるのであります。諸君、こんな名調子で、私は歸朝後の歡迎責めに逢つた時に挨拶をやらうと思つて今黄海に向つて練習して居る處です。

おかしいとは失禮な話だ。

さういふ失禮なことを云ふ諸君こそ、私が歸朝後第一に先づ私の處へ洋行談拜聴女色綺談拜聴と押しかけて來るのだらうが、いまさういふ失禮な態度を見せてくと、その時諸君は後悔しなければならぬが、それを承知ですか。

で、いよく上海が見えはじめました。さあそれでは私は船室へ戻つて上陸の準備をしよう。歐米諸國の間に於てさへ既に有名であり、素晴らしい魅力を以て白人の心を捉えてゐる上海が、いよく私を迎えるのだ。私とてもそこばくの準備を費さねばならぬだらう。それがこの東洋の妖女、ミス上海に對する禮でもあらう

おや誰かノックしてゐる。

「何だ？」開けた扉口にはボーイが敬禮してゐるのだ。

「はい、もう御上陸ができるので御座いますが……」

「ふう、それで何か？」

「はい、御荷物はこちらで御運びいたしますが、あの、案内人を御伴れになりますのでしたら、私がシイツクなのを御呼びいたしますが……如何いたしませう」

「案内人……」の要る程に騒ぐ土地ぢやなからうが、それにしてもシイツクとは？

「一體幾何費用がかかるね」

「はい」一つおぢぎをしてゐる。そんなことより早く返詞をすればいゝんだのに、私は上陸を急ぐのだ。

「いろく御座いますが、やはり上等の人を御頼みになります方が御愉快で御座いますので……」

で、どうも容易に要點に觸れようとせず、前説が長いので私は右脚を一つとん

と踏んだものだ。

「それで先づ幾何だといふのだよ」

「はい、恐れ入ります」おや、亦おちぎをしてゐるぢやないか！

「上等の案内人は一晝夜十五弗で御座います。」

「一晝夜？一晝夜？……シイツク？」

「はい、それは斷然シイツクな案内人で御座いますが……」

甲板上では足音が大分忙しさに響いてゐる。たぶんランチが着いたのだらう。

「兎に角呼んでくれ！見よう、一度」

「はい、直ぐ呼びますが、え、旦那の御出迎人といふことにして参らせませうから……」

「案内人が出迎人として……」

「はい、迎も税關が喧しう御座いますから、さういふことにして参らせませう」

「ふう……さうか。」で漸く私にも判つたのだ「ぢや早く來させろ！」

で、私は又、ベットにどつかり腰をかけて了つたのだ。が、内心非常な驚きでありますなア。

世界を一周して、勢から鼻を高くするに足ると信ずるだけの見聞を積んだ私も、この新手の案内人としての出現は、眞に意表に出られたものなので、今更乍ら上海といふ土地に對して感心させられたのでしたよ。

とに角、來るときまれば早く來るに限る。何んな者が、どんな様子で來るのか、この未知の經驗を早く知りたいといふ氣で一杯になりましたよ。

船室を出て甲板から見てやらうか、と思つてゐると、コツコツとノツクの音です

「おはいり！」

「旦那様のお出迎の御婦人を御一名、御案内して参りました！」と例によつてべりとおちぎをしたボーイの後ろに、おう！　おう！　おう！

諸君、素敵な一九三一年型の若い洋装の婦人が、につこと笑つて私を見てゐるぢやないですか！

『よう……』これが、この久し振りに久し振りに逢ふ處の、初めて逢ふ處の出迎人に對する私の第一語だ。

氣がつくと、何時の間にか、ボーイは消えて失くなつてゐるのだ。

『すい分しばらく振ね、お兄さん!』

流暢な日本語でやつてゐる。

『すい分久し振だね!』と私もやつたものだ。

『うふふふふ、まつたくこれより久し振はなしだね、でも初めにしちや、貴郎はすい分圖々しいのね!』

『何よ……そつちに釣られてつかうなるんだよ』

『そんな、どうだつていゝわよ……さあ、早く上陸しませうよ。おう臭い、船の中はすい分臭いぢやないの……』

『逆も斷然、顔負けしたねこりや……ぢや行かうか、だが何處へ引張つてく?』

『何處だつて間違なしつて好い處へさ……大丈夫安心して被居やいよ。』

『では、荷物の届け先のホテルを教へてやらなきや、ボーイが困るだらうから……』
『大丈夫! ちゃんと私が先刻來た時に、お兄さまの荷物は虹口の日本旅館つて教へてをいたから安心なさいよ。』

『いやはや、よくこれで生命を助けてをくものだね……』

『でも死なしちやお金にならないでせう』

『いやだね……止すよ、もう!』

『あら、酷いわ。ぢや温和しくしますからね、お兄さん!』

『よし、よし。どうも仕方がない。さあ行かう!』

『おう嬉しい!』

で、腕を組んだですよ。そして、ランチから税關を通過して上陸さ。

上海の景色はどうだつていふんですか? それほか……いや、逆もいゝ景色でしたよ。何しろ三國一の美しいのを伴れてゐるんですからね。

上海の名産? ま待つて下さい。まだ上陸したばかりで、これからこの婦人から

上海を教はらうといふのに、名産の名物のつて……いづれ歸る迄には、名物が海月か野鶏か位は瞭然區別をつけるから、それ迄待つて下さい。

で、私達はですな、まさしく私達ですよ。その私達は直ぐタクシを呼びましたよ『何處まで引張つて行く氣なんだ？』

私は怪しい評判の盛んな上海であるだけに、尠からず氣にはしてゐるのだ。若し生命を取られて六神丸にでもされちや、折角の土産話を聞かす暇もない、と本氣で思つてみたりして、女が運轉手に行先を命じたのを見ると、問ふたものだ。

『いゝの〜！ 行きついたら教へてあげるから……それまで、お兄さんは黙つてゐらしゃいよね』

『大丈夫かい？ 變なところ……』

『ほ〜〜』女は私をごつんと眩で突いたものですよ『これより變な處は先づないのよ』

『ふあア……』

まつたく、どうも聊か参つたです。

處が車は間もなく女の命令で停車しましたよ。素ツ晴らしい賑かなごたついた處に車が停車したのですよ。何處だいこりや？へえ洋館が並んでゐて、とつても景氣のよい、見馴れた東洋的な繁華振だが、と右を左を見る私の袖が、忽ち女によつてぐいと曳かれたものです。

『お兄さん！ いやあねえ……早く降りて頂戴よ、人が見て……』

『え？』

と氣がつくと、なる程、素晴らしく周圍に見物人がゐるのです。世界週りをしても一向氣の強くなれぬ私だもの、さつと飛び降りたですよ。

『で何處なんだい此處ア……』

『此處がね、南京路と浙江路の交點よ。聞いてゐるでせう、町の名位いは』

『かも知れないが……でありや何だい？ あの七階建の洋館は！ 堂々としてゐるぢやないか！』

「一つが永安公司、それから先施公司、新々公司といふデパートメントストアよ。」
 「あゝデパートメントかい！ 何あんだ」
 「と、まあ仰やいよ！ そのデパートに今、驚く顔を見てあげるからよ……さ、此處へはいるのよ」

「此處つてこりや、永安公司ぢやないか……買物なら先づ一度旅宿へ行つた後でいぢやないか」

「ふふふふ。上海は日本の如くに品物を賣るだけのデパートの建物でないのよ。いゝから、さあ！」

「ほう！ 民國呉服太物よろちい、か、チナけんちう、品上等ありますかつてやるんだらう。第一賣子が男で、品物が貧弱ぢやないか、こりや……」

「さう、こんな處に用事はなしさ……このデパートはね、二階三階四階五階の表側だけのよ。そして裏側がね、これからお兄さんと一緒に行つて休むホテル大東旅社なの……どう驚いて？」

「ほう……一寸洒落てるんだね。で六階は何に使つてる？」

「それは晩になつてから、一緒に伴れてつたげてよ」

「ふう……ぢや、荷物と私は別れ〜といふ譯かい？」

「いゝぢやないの、その代り上海の一流ヤチさんと一緒だもの……本當は貴郎は幸運よ！ あたしの相手になれてさ！」

「いや、ほざいたりな、ぬかしたりだぞ、だが、そのヤチつちや何の事だい？」

「あはゝゝゝ男みたいに笑つたものだ」それも晩になれば、澤山教へてあげるから……」

で、諸君、本意なくもこれで暫時私達男女は休憩だといふのです。残念ですな！ 何しろ私の不案内の土地ですね、その上案内人が、この大東旅社で晩迄の休養を命ずるのですからね。どうも、もう私には仕方ありませんよ。不可抗力ですよ！

では、また夜分に御目に……不可ませんね、そんな卑しい笑ひ方をしちや。ま御勝手に、御想像下さい。では、晩に御目にかゝりませう！

野雞と歡樂境

今迄眠つてゐたのかといふのですか、どうして。もう既に、永安の六七階のあらゆる支那民衆娯樂を參觀して、一寸驚いてきた處ですよ。

何があるかと云つたつて、新舊の演劇は元より輕業、手品、講談、シネマ等から飲食店、玉突き、覗き寫眞、賭博といふ風に何でもあるには驚きましたよ。それがみな満員といふに至つては、眞に感歎ものですよ。

處で、これからですか、さあ彼女が伴れて行くといふんですから……あゝ、彼女ですか？ 彼女は今トワレットでお化粧の修正でせうと思ひますが、おう、來ましたよ！

『さあ、直ぐ行くか？』

『えゝ、もちよ！』

で。また私達二人は外へ出たものです。

『これから何處へ行くんだ？』

『これからね大世界へさ。と云つても判らんでせう。共同租界と佛租界の境界線の

エドアール大路の傍の大歡樂境の大世界よ。』

『ほう、面白さうな名だな……行つてみよう』

『そら！ あの人集りを御覽なさい。何事かと思ふやうでせう、處が、あれが別に何事といふでもない平日の姿よ、それが大世界の人氣のある證據よ。』

『おつとゝ、なる程こりや酷い人出だ。』

『さあぐんぐんいらつしやい。』

で、女について私は人の頭ばかりの中を、やつとその大世界へもぐり込んだものです。内部は例の永安と同様なものです。處が、此處は専門の遊び場だけに、とてもくその景況たるや盛んなものです。

で、私達は喧騒を極めるバックや賣店や、飲食店の側を通つて場内を二階も階下も一巡してから中庭へやつと出て、ベンチにかけてほつとした譯です。

直ぐ熱い蒸タオルとお茶が來ました。これは、息つきには恰好のものですよ。やがて女は私を見てにやりと笑ふのです。

「まだヤチを教へなかつたわね、これから所謂一流といはれるヤチを見せてあげるから、そして漸次下流に及ぼすことにしませうよ、ね」

「さう／＼ ヤチ ヤチ そいつを知らなきや！」

女はどん／＼先に立つて、場内でこんどは美装した女を、観客や通行人の間から出しては、私にびたりと屈着いて云ふんですがね

「どう？ お兄さん、あの立派な女！ 立派でせう！ あれもヤチよ、あれは一流

此方の人も美人でせう、同じ一流よ。向方から来る、ポップのよ、あれは二流よ！」

と云つた風に教へ指差される女は、悉くとても上品な立派な人です。處が、さう

いふ風に一々女を指差してをいては、その後にはすよ、必ず女が附言するのです。

「あの人とあたしを比べて、さてどう？ あたしが見劣る？ ようく見て頂戴よ、

こんなことでお世辭は眞ツ平よ！」

だといふのです。

が、正直の處、この女は決して自惚れでも何でもなく不思議に、上品で美しくて

斷然それらの女よりも優つてゐるのですもの。

「や、たしかに君の方が立派で美しいよ、それにその日本語たるや日本人さへも及ばぬ程だから尙更以つていゝよ。だが留學してゐた位いで、よくさう迄なれたものだよ」

私は正直に云つちまいりましたよ。すると女はくす／＼と笑つてゐるだけで、別に何とも云ひません。

「で、これからね、もう今晚の最終の見學に行つて、それで今晚は大東旅社へ歸つて寝ませうよね！」

だといふので、また、引つぱつて行かれたのが、茶館青蓮閣……ほう、知つてますか、大變有名ださうですよ。そこでした。

が、これには参りました。

大變有名な茶館だけに、こゝのことは別に申上げなくもよろしいでせう。

だが、云はさあ濟まざることは、この出がけに、うちや／＼と集つてゐた三流級

の女、さうくその野鷄ですよ、その娘々連が、出て行く私を見て、お世辭に後ろから言葉を投げてくれたものです。

『スケベイ、又お出で！ね、デレスケ！』
だから喫驚しましたよ。

獨逸のは向きあつただけにそれ程、どぎつくはこたえませんでしたでしたが、何しろ出て来る背後からの送り言葉だつただけに、はつと参りましたね。

彼女？ え、彼女は腹を抱えて笑ひ乍ら、先に逃げ出しちまつたのだから、薄情な奴ですよ。

おう、その野鷄ですか、詰り商賣女のことなのですが、大變に上下がありませんよ詰り私の案内人と、いまの船員相手級の青蓮閣の女と程の差があるのですよ。

やれく草疲ましたよ。

『疲れた？ 弱いね』

『上陸した日だも、全體がどうもちと今日には過ぎたね……』

『さう……ホテルへ歸つて早く休養としませうよ、ね！』

では、諸君、今度は明朝までまたお別れですよ、これから支那人力車の黄包車で歸りますよ。

御隨意に御想像下さい。お眠みなさい！ お眠みなさい！

さて諸君、私の船は今、壯途を終えて心の軽い私を載せて、瀬戸内海を静に進んでゐます。何故上海の尻を切つて了つて、突然瀬戸内海かといふのですか？

詰り上海は大體があれで終つたと同じですよ。あれ以上細しくなつてくると、大變な頁數に上りますからね。

あ、あれ、あの案内女、溪女史、野鷄女王のことですか。あれは、まもなく日本へ来ることになつてゐます。何しに誰の處へ来るかつてですか？

それについて面白い話を忘れてゐました。それを云つてをきませう。

え、あれが来るのは直ぐです、神戸で待ち合すことになつてゐます。處です

よ、あれの面白い話といふのはですな。
 彼女が大變日本語が上手かつたでせう。處がそれが民國人ぢやないのですよ。出航を送つて私の船室へ來た時に、私と最後の言葉、えええ！ 上海での最後の言葉としてです、彼が、私に囁いた秘密の一語が。
 『あたし、次の船でモウ日本へ歸るから神戸で待つて、頂戴よ！』
 だつたのです。お解りですか！ つまりにも即にも、彼女は正真正銘の日本人だつたのです。

(完)

昭和五年十二月十五日 印刷
 昭和五年十二月十八日 發行
 昭和五年十二月廿五日 再版發行

定價金壹圓也

【世界女色綺談奥付】



著者 寺 尾 大 觀
 發行者 伊 藤 三 郎
 印刷所 岩 崎 印 刷 所

東京市神田區今川小路一ノ三

白鳳社

振替東京八一二〇三番
 電話九段(33)二四五一番

發行所

舍芳正山大版盤

最新刊

性に目さめら頃

須藤鐘一先生著
永江晃一畫伯裝禎

◆四六判尖端美裝◆二百六十頁の美本◆
定價金一圓廿錢也

送料 前金注文金十二錢
代引注文金廿四錢

人として人の經來りし幼き頃を思ひ出してみよ
うではありませんか、男としてまたは女として
各自がどの様な世界を眺めつ踏みつ育つて來ま
したらうか。
幼き頃にもどんな悩みが私等の心を捉えたでせ
うか。どんな怒が身を焼き、どのやうな憧憬が
私達の心を引立てたでせうか。
悩ましさを限りなる私達の性の目さめる頃、私
達はどんな驚異をこの世界に發見したこととせ
うか。どんな邪惡の相を、この世の人々の間に認
めさせられたこととせう。
性に目さめる頃、本書一本が示す世界は恐らく
讀者の血を再び昔の若さに甦らせ、此上なき不
可思議な魅力ある世界に誘ひ行くであらう。諸
君よ息つまる悩ましさを再び知られよ……

拾八版

處女なき國

カヴルアント著 石橋薰譯

武士階級の專制政治の下に多年壓迫されて來た戀愛觀念は時勢
と共に必然的に解放され夫れと共に貞操に對する疑惑は次第に
深まりつゝある。一方にはジャズ時代の影響を受けた露骨なる
性の展開と自由なる立場より考察した戀愛觀は處女なき時代を
生んで居る、本書は古い道徳に支配された性、戀愛、結婚の制度
から解放された現代の戀愛觀を紹介し現代結婚の亂れた有様と
アメリカ、ロシア、ドイツに於ける新しい道徳を説き古い道徳
の破産と極端な現代の性生活を對比して遺憾なき批評を加へ現
代の戀愛、結婚、賣淫等あらゆる性生活の表裏を描いて處女な
き現代が多年の壓迫的制度的爆發である所以と其過程を詳述し
てゐる。現代生活を營む者の見逃せない性生活の參考書である。

目次内容

- 一、ジャズ時代
- 二、古い道徳
- 三、現代道徳の渾沌と社會の背景
- 四、現代結婚の亂れ
- 五、アメリカでの新しい道徳
- 六、婦人の道徳の上に及ぼすコン
- 七、友人結婚と性的衝動
- 八、賣淫とその新しい道徳
- 九、流産と古い道徳の破産

四六判美裝二八〇頁

定價一圓二十錢 前金送料八錢
代引送料金廿四錢

- 一〇、私生と反抗
- 一一、革命的な新しい道徳
- 一二、戀愛、結婚、離婚
- 一三、娼婦調節と流産について秀れた
- 一四、方法
- 一五、賣淫と花柳病
- 一六、ソヴエットロシアの無益な道徳
- 一七、結婚愛と性的生活
- 一八、索引

最新刊

文なしから千圓まで……

小金儲けの手順

◇四六判美装函入◇
◇九ポイント組◇
◇二百廿頁◇
定價金壹圓卅錢
送前金注文金十錢
料代引 金廿二錢
注文

浅野喜八郎先生著

本文内容

今日の如き不況時代には、氣の軽い娛樂書、エロ物を讀むか、さもなくば勇奮一番本書の如き金儲け書を讀むにある。然し、注意を要することは、現今の如き不況時には、夢の如き百千萬の金儲け本等を讀んだ處でその實現に望みが更にならない徒に頭を疲らすに過ぎない先づ本書の如き文なしから千圓までの小金儲けの手順を説く物を読み、直ちに實行するが最も賢明なことである。この時期に諸君は小金儲けをなし、次の來るべき好況時の勇飛に具えることが肝要であらう。

本書には六十七項目に分けて文なしの失業者から若干の資本のある人迄の、小金儲けの方法があます處なく説明されてある。特に文なし資本なしの人の爲に説かれた多大な部分は他に類書のない本書獨特のものである。速刻御購讀を御薦めする。

時節柄最好の小金儲けの手順を本書によつて知られよ

道家齊一郎先生著 欧米女見物 辛版 定價金一圓 十送二

フアールブルユー入著 生慾生活の合理化 再版 定價金二四廿錢 八送二

青山正夫 譯

終

